

- ・竹は、まっすぐに伸びる真直な心を抱きつつも自ら（雪の重みで）低く地に倒れ伏している。
- ・竹はひたぶるな貞節な心を抱きつつ、（雪の重みで）二つに割れてしまっている。
- ・竹の長いものは、漁竿にしておけば良かったものを
- ・早くこうなる前に裁断しておかなかったことが悔やまれる。
- ・竹の短いものは、書簡にしておけば良かったものを
- ・こうなる前に早く切つて編みつらねなかつたことが惜しまれる。
- ・屋内では竹簡を提げ、屋外では釣竿を垂れることの出来る日々が送られれば、
- ・私の生涯は、この上なく幸せであったはずなのに
- ・こんな繰り言を何千何万回と口にしようと、今となつては何の効き目もない。
- ・ただ涙がとめどなく流れて来て、一人寂しくむせび泣くのみである。
- ・たとえ、私という主人がなく、だれもあの雪に折れた竹を支えてやることは出来なくても
- ・松柏とともに凋み後れる竹であるお前の貞節な心は（囲りがどうであろうと、主人がいようがいまいが）どう出来よう。（きつと）いつまでも不変であり続けるはずである。

## 考察

### 「二句目」「此君遠離別」の「此君」について

晋の王徽之が竹を指して「何ぞ一日も此君無かるべけん」といった故事とは次の一文を指す。